W125
408

羊城新鈔

中山省三郎

詩集

羊城新鈔

中山省三郎著

W125
408

國立國會
9.11.14
圖書館藏書
97Wa8312

梯梧の花の散るゆ
ふべ
旅愁をいわはれへざ
りき

樵

本書は七拾五部を限り
私版日孝山房より刊出
するものにして本冊子
は其の第七拾四番なり

裝本　西川滿

裝畫　立石鐵臣

羊城新鈔

海珠橋

○

沖繩島は急に眩しい陽ざしに現れ、
鮮かな綠青いろの珊瑚礁に寄せかへる波、
胸のうちに　何かしら　湧きて來るもの、
この位置を　今さらに　ふりかへり見て。

（琉球にて）

○

雨もよひ、夕ぐれの河、
舟にて逐ふ　家鴨の群れ、
甘蔗、叢篁、煉瓦の家、
次々に變りゆくもの、變らざるもの。

（基隆河の上にて）

○

日沒のまへに　扇椰子、
亡き父の扇のやうに　開いたまま。
南門町の霜月は
樹かげの池に　あの鶺鴒や、あの鷿鷉（かいつぶり）。

（臺北にて）

○

（この海には樹がない、
樹のないところに　風がある）と。
雲海のうへにまた　雲のある空、
オフェリヤよ、鳥のゐないところに空がある。

（空にて）

○

福建省は　雲海のかげ、黄土の岸、
碧い波のかなたにつづき、
人の影も見せず、代赭いろに耀いて。
山越えて川あるところ、心に描く。

（海峡にて）

○

海に近いみづうみは　翼のかげにまどろんでゐる。
遮浪墟、岬のはての燈臺の白、
忽ち過ぎて、燻朱ひと色、
愕きのいとまもなく、冷たい硝子に顔おしあてて。

（海豐縣の海岸にて）

○

白耶士灣は　何ごともなかつたやうに輝いてゐる、
光はひろがる、黄金（きん）いろに、層雲のひま、
渚べに　生新しい格子縞、
程なく去つて、眼に沁むる空。

（惠州府にて）

○

珠江は靜脈のごとく、
嶺南の平野を流る、
月の夜は　靄も立つべし、
眼をとぢてしぬべば　わがうちを流る。

（珠江の上にて）

○

水のおもてに　マストの尖端(さき)、
そのあたり、しぶく青波、
戰ひ　遠ざかつて
海珠橋、行く人の　日かげと共に遽し。

（廣東にて）

○

みどり兒は　樹蘭のかげに小さく睡る、
花の香や、　わが眸はかすみ、
砲聲は遙か遠くに鳴つてゐる、
今は硝子の振動にも愕かぬ　支那の子たち。

（東山にて）

○

頽れた窓の向うに、　珠江は阿古屋珠のやうに光つて、
ほんの少しばかり　見えてゐる。
月が出て、　白い犬が一ぴき、
阿香の茂る　かげにかくれる。

（河南にて）

○

食在廣州、
竹籠に眼を光らせてゐる狗、
鬢を張つて、長い象牙の櫛をさした　田舍の女、
飯館に油の沸るを、手洟をかんで待つてゐた。

（惠愛中路にて）

○

雨あとの微風にもゆれる　いかだかづら、
戰線からかへつて來た兵士たちは寡默である、
當然のことをして來たやうに、
光のさだまらぬ池のほとりに　鈎をしづめて。

（廣東近郊にて）

旅雁抄

○

夜ふけて渡る微かな寒さ
竹のそよぎを耳に聽いて
戸をあければ散つて來る　胡蝶樹の花
晨（あした）に見れば　籬のうへは
夜つゆに濡れた花のくれなゐ

○

大唐の港をさして
蒲桃の花の香りの中から
繁り合ふ榕樹の　蔭をくぐり、
南十字星をふり仰いで、

鉛いろの珠江の流れを遡つて來た
波斯の人たち、錫蘭の人たち、
今は砲聲殷々ときこえ、
久しぶりに降り出した雨の冷たい中に、
ユニオンジャックの旗が濡れてゐる。

○

珠江の水は東し西し
淡青く濁り、
いづくに流れ
いづくに去るともなく。

舟をうかべて東し西し、
水に生まれ　水に消えてゆく子供たち。
江のほとり、頽れた家の籬に
咲いて散る　藿香(かはみどり)。
珠江の水は東し西し

○

赤白青の旗を立てて
埃にまみれた龍舌蘭の道を
トラックに乘つて來たフーケ神父。
神父よ　これ見よと

手に貼りつけた木の葉をはがせば、
くづれた手は珊瑚のやうだ。
雲は鹽化白金バリウムのやうに輝いて、
ユーカリ樹のもとに　花と咲く
癩。

○

今宵は　八大山人の風景のうちに宿る。
トラックのうへに眼ざめて
隣れる兵士を起し
ああ　あれは大熊星座、
あれは　さそり座、
あれは獅子座と、
星空を眺めながら
兵士は遙かなものを偲んでゐる。
水にうつる星かげ、
微風にゆれて　また静かになる。

○

びらうの葉かげに、
長春花の花は萎れてゐる。
道ばたに歌をうたひ
胡弓をひいてゐる　盲目の老女たち、
幼いときに盲(めしひ)にされて

若き日は春をひさいで
今は年老いて、頽れた街に喘いでゐる。
彼女たちは自らの歴史に愕きもせずに
なほ衰へぬ聲を張りあげてゐる。
人の氣はひもない町に　夜が來たら
微かに　彼女たちは　むかしの觸感を辿りながら
ほとぼり冷めぬ大地のうへに眠るのだ。

○

色あせた氈衣をまとひ
珠江に花舟をうかべて
嬌娃は瞬眄をおくる、

水のべの垣のあたり、
佛桑花　くれなゐに咲き、
行く人も稀れに　戰ひのあと、
まひるの時の　ただに移る。

○

榕樹は道に暗いかげを落し
ゆすら椰子の葉は
爽かな風にそよいでゐる。
群り群る　水のうへのフラワーボート
黄金(きん)と紅(あか)との。
ユニオンジャックの旗をかかげた

香港行の船も遠く消えて、
粤漢線の驛のあつたあたりには
遽しい夕ぐれのまへに
砂塵の間にこぼれた米粒を拾ふ媼(おうな)たちが
聲もなく　うごめき
嘗ての日の煙硝の匂ひも消えてゐる。
陽が落ちれば忽ちに夜が來て、
蛋民の船にともる　蠟燭。

○

急げ急げ、驟雨が來る。

錘をあげよ、ああもう　そこの岬だ、

女の手には鯉の鱗、

今はなくなつた十錢の銀貨のやうに。

羊城新鈔　畢

昭和拾五年六月廿日印刷
昭和拾五年七月一日發行

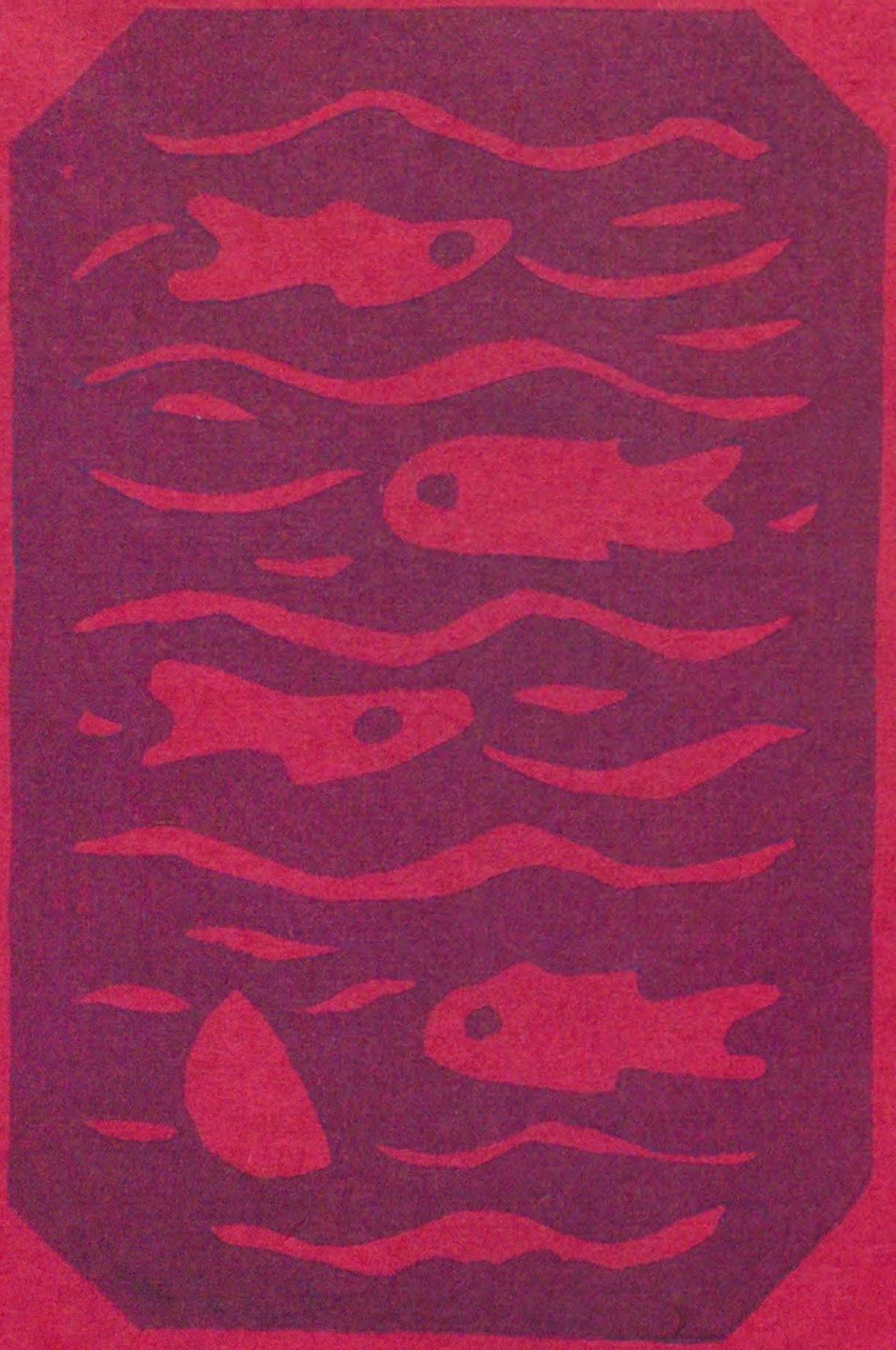
著者　中山省三郎

發行者　西川滿
臺北市大正町壹丁目貳番地

印刷者　中村誠德
臺北市榮町壹丁目廿八番地

印刷所　松浦屋印刷部
臺北市榮町壹丁目廿七番地

發行所　日孝山房
臺北市大正町壹丁目拾四番地



国立国会図書館

新曲

羊城新鈔

中山
[illegible]三郎

W125
408

W125
408

97WA8312

97Wa8312